

エー A ジー G ファイブ 5 だより

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)



アスンシオン日本人学校による日本語学校での オンライン出前授業・教員研修の試み

AG5運営指導委員・東京学芸大学国際教育センター准教授 見世 千賀子

戦後移住の多いパラグアイには、首都アスンシオンを含む3都市と地方の6つの日系人移住地に日系人子弟に向けた日本語学校があります。各校では国語・日本語や書写、音楽、図工、体育、日本文化（四季の行事、和太鼓等）などを取り入れた教育活動を行っていますが、世代が進むにつれて日本語の継承は難しくなっており、教師の確保や力量形成のための研修は、日系社会の大きな課題です。今回は、アスンシオン日本人学校の先生方が、教員研修のニーズに応じて、コロナ禍の2020年に行い大変好評を博した、日系人の子供たちへのオンライン出前授業と教員研修の試みを報告します。

アスンシオン日本人学校では、これまで日本語学校（以下、日語校）や日本式教育を取り入れている現地校の教師を対象に授業公開や研究協議会、日語校での日系人児童生徒への出前授業や教員研修会を行ってきました。しかし、昨年はコロナ禍にあつて対面では行えませんでした。そこで、いち早くオンライン授業に取り組んできた日本人学校が、ZOOMによるオンライン出前授業と教員研修を企画し、六名の派遣教員全員で六回の出前授業兼教員研修を行いました。出前授業の対象はアスンシオン日語校の児童生徒ですが、その日本語力には大きな差があるため、日語校教師もT2として授業に入り、必要に応じてスペイン語で通訳をしました。また、パラグアイのすべての日語校の教師に授業をオンラインにしました。自主参加の研修でしたが、毎回四十〜五十名の参加があり、一回目の出前授業は、加藤雅亮校長先生が中学部二・三年生十五名を対象に、昨年度新たに作成した社会科副読本『わたしたちのパラグアイ第三版』を活用して開発した、社会科単元「30年後の首都アスンシオンの街づくりを考えよう」をテーマに行いました。

徒も活用できるような工夫を凝らしています。授業の大まかな流れは、まず副読本を紹介し、昔と現在の写真からアスンシオンの街の変化を読み取ります。次に、都市問題について考えるための手がかりとして日本の中学校地理の教科書の内容を紹介した後、アスンシオンの良いところと課題について生徒に考えさせます。その後、世界の都市の工夫を地図や写真を示して気づかせます。そして、ZOOMのブレイクアウトルーム機能を使って生徒を少人数のグループに分け、三十年後にアスンシオンをどんな街にしたいかを話し合わせ、グループごとに考えを発表させます。生徒の発表では、特に渋滞の多いアスンシオンの課題を解決し、三十年後に快適な街にするために、「地下鉄を作る」、「自転車道を整えて、もっと自転車で移動できるようにす



新たな副読本では、日系人の移住の歴史に関する資料や記述を増やし、日本人学校だけでなく日語校の児童生

徒。環境にも健康にも良い」、「川を使って水上交通をもっと行う」、「パラグアイ川の向こう側に新しく首都を作り、もっと橋を架ける」等の意見が出ました。授業後の生徒の感想には、「いろいろな資料があり、面白かった」、「自分たちの街の未来を考えるのは興味深かった」、「私たちの街を、私たちが将来いい街にした」等がありました。

この授業では、資料から必要なことを読み取る技能や都市問題への知識理解を得て、今後自らの住む街・社会をどう創りたいのかを考えることができる市民としての資質や能力を育むものになっていったと思います。参加した日語校の教師からは、「実際に生徒たちが見ている画面が見られたことで教材の提示や発問などの参考になり、今後の教材準備や授業展開を考えるうえで参考になった」、「ZOOMを使った授業でグループに分けての話し合いなど、いろいろできることを知る機会になって良かった」、「副読本の活用例について学べた」等のほか、オンライン授業の方法や副読本の活用方法、生徒を飽きさせず考えさせやすいスライド教材の作り方や提示の仕方等、大変参考になったとの感想や、「社会的な考え方を育てることが必要であると気

* T2：特定の子どもの支援を担当する教師



づいた」といった自らの教育観を振り返る感想がありました。

金元弘子先生の授業でも副読本を活用して、小学部四・五年生を対象に日系人の移住について学習する総合的学習単元「のこしたいもの」をつたえたいもの」が実践されました。

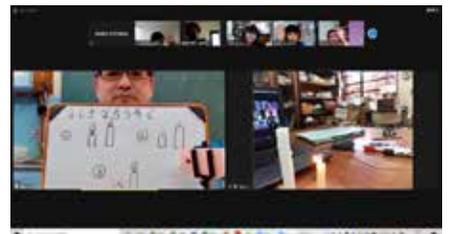
導入では、先生と児童の距離を縮め、児童の意識を少しずつ日本に向けるために、アイスブレイク（以心伝心ゲーム）が行われました。先生は、「みんなが好きなバラグアイのお菓子といえは？」、「日本の食べ物といえは？」といった問いかけをし、子供たちはその答えを紙に書いてビデオカメラに映します。幾度かのやり取りの後、移住についての学習に入ります。クイズ形式で、移住地まで何で行ったか考えさせたり（答：牛車）、副読本で実際の写真を見せ

てわかりやすく説明したりしながら、最後は、移住当時の生活について、もっと知りたいと思つたことを一人ひとりに発表さ

せます。「昔のこともっと知りた」といった声が聞かれました。この授業では、日本語での発話を促し、移住への興味・関心を持たせる工夫がされており、児童に次への学びの意欲を持たせるものでした。

参観した教師からは、「生徒と仲良くなるためのゲームが良かった。生徒の反応を待つことの大切さを改めて教えられた。今後の移住学習に取り入れていきたい」、「とても楽しい授業だった。最初のゲームも、あのように始めればみんなの緊張もとけて良いなと思った。イラストや写真も多く入れることで、子どもが興味を持って取り組めることも参考になった」といった感想がありました。

出前授業の前に日語校で実施された高校生対象の授業では、「日系人として両国の架け橋になるにはどうしたらよいか」、「自分には何ができるか」という問いに対し、「自分にできることはない」、「日本がバラグアイに援助するのはいいけれど、自分たちからすることはない」、「架け橋」というのがあまいでよくわからな」といった意見しか出なかったそうです。しかし、日本人学校で作成した副読本や移住すごろく、完成間近の移住カルタ等の教材を活用すれば、日系人としてのアイデンティティ形



成に資する取り組みができると思います。他校の教師からも「昨年、中学生を対象とした移住学習の授業に『移住すごろく』

を使わせていただいた。バラグアイの日系のルーツをクイズ形式で学び、とても盛り上がった。この度いただいた副読本も、これから大いに役立てていけると期待している」との声がありました。

この他の出前授業には、小学校六年生十三名を対象に行った伊原達也先生の理科の授業もあり、単元名「考える観察—科学の考え方を学ぼう—」では、理科室から実際に二つの不思議な現象・実験を見せながら「観察する、仮説を立てる、実験する、考察する」という科学的な考え方の流れを学びました。

子供たちからは、「あまり実験を学校でやっていないので興味深かった」、「実験は楽しい。もつといろいろな実験をやってみたい」といった感想があり、参観した教師からは、

「とても参考になった。普段、読み書きを中心していたが、子供が飽きる授業を行っていたことを反省している。もう少し子供たちが興味を持つ授業にしなければならぬということをお教えられた」、「面白くて興味のある授業をするのが大切だと思つた。子供の思いや考えを大事にしながらか的好奇心をくすぐり、学習意欲を引き出すような授業をする必要があると感じた。答えを全部解説するのではなく、自分で考えさせるのが大事だと気づいた」等の感想がありました。

本稿ですべての授業を紹介することはできませんが、参観した教師の感想からは、いずれにおいても、自らの授業実践や子ども観・教育観を振り返り、相対化して捉え直すきっかけとなつており、今後の授業改善につながる事が伺えました。

参観はオンラインでも可能なため、日本型教育の発信や教員研修において新たな可能性を実感させるものとした。時差の問題はありますが、日本から教員研修を行うことも含め、今後新たにできることを検討していきたいと思つています。（出前授業の開催にあたってご尽力くださったAG5コーディネーター平岩佐江子さんにも感謝申し上げます。）